東陽病院だより

健康ウォッチング

東陽病院　院長　伊藤　文憲

胃の病気（Ⅱ）

横芝町の皆さん今日は。前回は胃の働きやピロリ菌の話、検査法について述べました。今回は具体的な病気についてお話しします。

胃壁の浅い炎症である「びらん」は「胃炎」とも言われています。胃では常に食物の消化活動やストレスにより胃の壁に炎症が起きています。胃炎はいつでも起こりますが、すぐに良くなります。炎症が進むと深い傷である「潰瘍」になります。自覚症状として、胃もたれ感や食欲低下が起こり、空腹時に上腹部に痛みを感じます。潰瘍が深くなると出血もみられます。吐血や出血が十二指腸側に流れると黒い便がでる下血となります。

以前は胃潰瘍の薬は効果が不十分で、出血したり再発を繰り返す難治性の潰瘍が多く、胃の切除術が行われていましたが、最近の20年間では胃酸分泌抑制薬が有効となり、手術例は減少しています。前回で述べたようにピロリ菌の存在が判明してから、その除菌が行われ、難治性再発性の潰瘍はさらに減少しています。胃潰瘍は主として内視鏡によりその存在診断と病気の時期の診断が行われています。悪性の疑いがあるときには粘膜の一部を採って調べる生検により鑑別診断も行われます。活動期や治癒期は投薬加療が行われ、瘢痕期では慎重な経過観察がなされます。

胃潰瘍の診療では常に悪性腫瘍（胃癌）が併発していないかが一番の問題です。内視鏡的な観察とともに、怪しい部位には色素の散布を行い、さらに組織の一部を採取する生検が行われます。生検が悪性でなくても繰り返し行う場合もあります。

次の問題点は出血です。潰瘍面に血管が露出している場合にはその破綻により出血が起こり吐血や下血を起こし、大出血ではショック状態となることもあります。この場合には緊急の止血治療が必要です。最近では内視鏡の進歩（電子内視鏡）や止血鉗子などの開発により内視鏡の直視下の止血操作が有効で、従来では緊急手術に頼っていた場合でも内視鏡のみで止血が可能となるケースが増えています。

「潰瘍」と反対に胃の壁から隆起する病気があります。一般には「胃ポリープ」と呼ばれるもので、形はいぼ状からキノコ状のもの、数も単発から十数個の多発ポリープ例もあります。組織学的には炎症性のものから、腺腫性さらに悪性まで多種に渡っています。診断は内視鏡を使った組織生検が必要不可欠ですが、大きなポリープの場合には全体の一部しか組織検査が出来ないため内部に悪性なものがあっても見逃す可能性があります。また、ポリープが大きくなると出血の危険性も生じてきます。これらを防止するためにポリープ全体を一括して採取するポリープ切除術（ポリペクトミー）が診断と治療を兼ねて有効です。　胃癌に関しては、次回にお話しします。

文芸

俳句

空深み秋の川瀬の流れ音
　山口　一秋

椋鳥の群のぶつかり夕茜
　長谷川理正

嵐過ぎ水嵩増しし秋の川
　今関満喜子

夕暮れて椋鳥の群数淋し
　小林　順子

開発や鳥も休めぬ秋の川
　福田　幸子

ひそやかな狭庭に揺れし水引草
　戸村　静華

街並を写してゆらぐ秋の川
　藤代　ゆう

我が部屋を我がもの顔やきりぎりす
　今関　茂生

河原石陽差しにさらす秋の川
　若梅あやめ

椋鳥の群なして去る夕焼雲
　野の光拾ひ集めて秋の川

夕日赤し釣瓶落しの九十九里
　椋鳥の風の流れに湧く如し

上越線右に左に秋の川
　選　者　玉虫　栗扇

椋鳥の一樹ゆるがす羽音かな
　秋川のほとりに建つや師のみ墓

椋鳥と言はれて笑ふ田舎者
　もの寂びてそこはかとなき秋の川

窓明けて心も明けて老の秋
　街楽しよかっぺ帰りの秋一日

短歌

病もつ友は吾家を売り払ひ
　終の棲家とホームに入る
　真家ふじ子

初孫の昂ぶり御輿をかつぐさま
　友はビデオを持ちてつきゆく
　田崎　尚美

停電の冷蔵庫の中じんわりと
　卵がはやも汗をかき初む
　八角　三枝

み祖の霊帰り来る今日庭に咲く
　花花多に活けて待ちゐつ
　宇井　ちい

水俣の台風被害はひどしとふ
　さあれ吾が里の無事をよろこぶ
　吉岡　信子

花咲かぬ百日紅に撒きし水
　涙にも似て幹をつたはる
　西山満里子

みち潮に打ち寄せられし蛤は
　返る波待ち砂にもぐりぬ
　佐瀬　初音

休耕田に背丈を越えて茂る葦
　冷夏の今年は減収と聞く
　押尾　輝子

風と雨いく日も続きひと日づつ
　延ばせし除草剤けふは振りゆく
　鈴木　やす

屏風絵のやうに白さぎ集ひより
　刈取り終へし田圃に集ふ
　池田　春江

庭先に汲み置く水が映しゐつ
　澄みたる秋の雲の白きを
　永藤　滋

友が投げしリンゴを双手にキャッチして
　交互にかじりし若き日思ふ
　萩原　信一

亡夫の句を写してゆくに吾を詠み
　娘を詠むところ筆の止まる
　選　者　斎藤つね子